

あんのうじま

くにむらせいじ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ジャガーとコツメカワウソが、嵐で川を流され、海を漂流した。突然の轟音。ふたりは上昇していくロケットを見た。ロケットは爆発し、破片とサンドスターが飛び散った……。

短編集「アイデアノート ジャパリ・フラグメンツ」から分離して、再投稿しました。TVアニメ2期のネタバレがあります。

小説でも台本でもない、変な書き方をしています。

後編のあとがきに設定が書いてあります。

目次

あんのうじま	前編	1
あんのうじま	後編	20

あんのうじま 前編

秋の始め。嵐に見舞われたジャングルの川。※1

木々が倒れそうなほど大きく揺れていた。大雨で川が増水し、流れが速くなり、所々でうずを巻いていた。水は普段よりも茶色くなっていた。※2

コツメカワウソ（以下カワウソ）「あはははは！ながされていくぞー！」
カワウソが乗った渡し船（破損した橋の一部）が、激しく揺れながら川を流されていた。

ジャガー 「カワウソ！ おりて泳ぐのもむりかつ！」

カワウソ 「むりむり！ おぼれちゃうよー！」

カワウソは楽しそうだった。

ジャガーは、渡し船を引いて泳いでいた。体をひねって、暴れる船をコントロールしようとするが、流れが強すぎて逆に揺さぶられた。

カワウソ 「ジャガーがんばれ！」

ジャガー 「もう少し、もう少し進めばっ！」

渡し船は、不安定に揺れながら蛇行していった。

ジャガー 「なんだこれ!? 横に進んでる!」

渡し船が、うずに巻き込まれ、川の流れと直角に進み始めた。

カワウソ 「ぶつかるー!」

コントロールを失った渡し船が、ゴツゴツした岩のある岸に近づいていった。

ジャガー 「戻れえっ!!」

ジャガーが、力いっぱい体をひねって、渡し船の向きを変えようとした。

渡し船が、きしみをあげながら横倒しになった。

ジャガー 「うわあっ!!」

カワウソ 「わあー!」

渡し船が岸にぶつかり、バラバラになった。カワウソは濁流に投げ出された。

ジャガーが、カワウソの腕をつかんで引き寄せ、抱き着いた。

ジャガーの頭に岩がぶつかった。ジャガーは意識を失った。

海上。嵐が去って快晴になっていた。

カワウソ 「しよっぱい水って、浮かびやすいんだねー」※3

ジャガーとカワウソが、ぶかぶかと海に浮かんでいた。ふたりは横に並び、手をつな

いでいた。

カワウソ 「つかれて動けないのに、浮いていられるよー」

カワウソは、言葉のわりに楽しげだった。

ジャガー 「く……このまま、死ぬのか……」

ジャガーは険しい顔だった。ふたりの周囲には海しか見えなかった。

カワウソ 「ジャガーといっしょよなら、かまわないよー」

カワウソは、ジャガーを見て笑った。

ジャガー 「カワウソ……まだ泳げるか？ おまえだけでも……」

突然、バリバリバリと雷のような轟音が響いた。

ジャガー 「なんだっ！」

轟音は一瞬では終わらず、長く続いた。

ふたりが音の方を見ると、強い光が上昇していくのが見えた。その後には、白い煙のように、サンドスターが尾を引いていた。

カワウソ 「おー！ すごくすーいー！」

上昇していったのは、小型のロケットだった。それは、ジャガーとカワウソの頭上に向かって飛んできた。

カワウソ 「わあー！」

ロケットが、突然姿勢を崩して横倒しになった。その直後、ロケットが爆発して、破片が飛び散った。サンドスターが空に広がった。

ジャガー 「落ちてくる！ 逃げろ！」

ロケットの破片とサンドスターが、ふたりの周囲に降り注いだ。

大きな円筒形の部品が、逃げようとしたふたりのすぐそばに落下し、水しぶきが上がった。

ジャガーとカワウソは波をかぶった。

ジャガー 「ぶはっ！ カワウソ！ 無事か!？」

カワウソ 「ちよつとげんきになったかもー！」 ※4

ロケットの爆発から1時間ほどあと。

海上を、アフリカオオコノハズク（はかせ）とワシミミズク（助手）が飛んでいた。ふたりは、海を見下ろして、何かを探していた。

はかせ 「あつたのです！」

ふたりが高度を下げていった。海上にロケットの破片がいくつか浮かんでいた。

助手 「大半は沈んだようですね ※5 …… ん？ あれは……」

ジャガー&カワウソ 「おーい!!」

海上で、ジャガーとカワウソが手を振っていた。

倉庫のような建物の前に、大人 ※6 になったかばんが立っていた。そこへ、はかせがカワウソを、助手がジャガーを抱いて飛んできた。

かばん 「誰? え!? なにがあつたの?」

はかせ 「海でひろつたのです」

かばん 「拾つた?」

カワウソ 「ひろわれたよー!」

助手 「漂流物なのです」

はかせと助手が、ジャガーとカワウソを地面に降ろし、かばんの前に降り立った。

ジャガー 「たすかったけど、もの扱いしないでほしいな」

かばん 「えっと、よくわからないけど……」

かばん 「ようこそ、アンノウジマへ」

ジャガー 「あんのうじま?」

カワウソ 「わたし、コツメカワウソ! で……」

カワウソが、ジャガーを見た。

ジャガー 「わたしはジャガー」

カワウソ 「あなたは、なんのけもの？」

かばん 「……わたしは、ヒト」

かばんは、少しだけ寂しそうだった。

ジャガー 「ヒト？」

かばん 「みんなからは、かばんって呼ばれてる」

倉庫のような建物のそばにある簡易宿泊所の、キッチン。

はかせが、オーブンの蓋を閉じて、加熱スタートのボタンを押した。

倉庫のような建物の中。

ジャガー、カワウソ、かばんが建物の中に入った。

建物の天井は高く、ホイストがあった。建物の中には、0.5 mほどの円筒形のものや、四角い箱などがいくつもあった。棚に何かの機械がいくつも置かれていた。部屋の隅にはテーブルと椅子があり、テーブルの上には、ノートパソコンと紙の図面があった。近くに本棚もあり、たくさんのファイルが収められていた。

カワウソ 「これなーに？」

3人の目線の先、部屋の中央に、横倒しに架台に乗せて置かれたロケットがあった。

長さは5 mほど、直径は0.6 mほどであった。完成形に近く、先端部分のカバーが外されたものが1機、未完成のものが1機あった。

かぼん 「これはロケットだよ。空高く飛ぶもの。サンドスターを使って飛ぶから、〃サンドスターロケット〃って呼んでる」

カワウソ 「サンドスターで飛ぶのかー。じゃあ、これはフレンズだねー!」

ジャガー 「いや、どう見ても違うだろ……。さつき飛んできたのはこれか」

かぼん 「ごめんなさい! 失敗して落ちちゃったんだ」

ジャガー 「いや、おかげで助かったよ」

カワウソ 「これ、落ちなかつたらもっと飛ぶの?」

建物の奥のドアが開いた。

はかせ 「目標は、宇宙なのです」

はかせと助手が、建物の中へ入ってきた。

助手 「宇宙にある、ヒトが作ったものまで飛ばすのです」

ジャガー 「ヒトが、つくったもの?」

かぼん 「リーダーに映ってるんだ。とても大きな物が衛星軌道にあるって。記

録によると、多分、宇宙ステーションだよ」

ジャガー 「……わからん」

かばん 「空の、ここからじゃ見えなくらい高いところに、とても大きな物が飛んでいるんだ。その中でフレんズが暮らせるくらいなの。それはものすごい速さで動いて、時々、パークの上を通るんだよ」

カワウソ 「おおー！ すごいねー！」

ジャガー 「すごい話だけど、そんなもの、ほんとにあるのか？」

はかせ 「あるのは間違いないのです。目がいい鳥の子が、それらしきものを見たとか、夜空に星とは違うものが動いてたとか言っているのです」※7

ジャガー 「鳥の子なら、そこまで行けるんじゃない？」

助手 「残念ながら、高すぎて鳥では届かないのです」※8

かばん 「そこには空気がないんだ。空気がなければ鳥は飛べないし、生き物が生きていられる場所じゃない」

カワウソ 「いけないのかー。ざーんねん」

かばん 「方法はあるよ。この島にある設備は、とつても高い所に、大きなロケットを飛ばすためのものなんだ」

カワウソ 「そこまで飛べるかもだね！」

はかせ 「おそらく、ヒトはそれができたのです」

かばん 「本当かどうか分からないけど、ヒトは、もつと高いところ、月や、もつと

もつと遠い星まで行けたって、本にあったね」

カワウソ 「星に、いく？」

かぼん 「パークの外にも、広い世界があるのは知ってる？」

ジャガー 「ああ、聞いたことあるな」

かぼん 「その世界が一つの星、地球なんだ。……えつと、ちよつと待ってね」

かぼんは、本棚から、手のひらに乗るほどの大きさの、四角い黒い物を取り出してきた。

かぼんが持ってきた四角いものにあるレンズから、地球の立体映像が投影された。それは大きめの地球儀だった。

カワウソ 「ふわぁー！ きれー！」

かぼん 「これが、地球……を、小さくしたもの」

ジャガー 「ほんものの魔法だ……」

かぼん 「青いのが海。パークは、この小さな島が集まっている所だよ」

かぼんが地球儀を回して、指差した。そこには点のような大きさの島がいくつあった。

かぼん 「ふたりが住んでいるのは、その一つ、『キョウシュウ』」

ジャガー 「これが？ うそだろ？」

はかせ 「夜空にあるたくさん星も、この地球と同じようなものなのです」

かばん 「生き物が住める星は、ごく一部だけだね」

立体映像がズームアウトして、地球から、たくさん星に変わった。

かばん 「これが、宇宙」

カワウソ 「パークはわたしたちの島だけじゃなくて、すつごく広くて、パークの外にも広い世界があつて、その外に、お星さまの数だけ、たくさん世界がー」

ジャガー 「待ってくれ……。想像がつかない」

ジャガーは、うつむいて頭に手をあてた。

かばん 「星の数は、夜に見えるものよりもずっと多いんだ。数えられないくらい。

ここに见えているのも、ほんの一部」

かばんは、立体映像を少し動かして見せた。

助手 「地球からは見えない星も多いのです」

カワウソ 「すごいねー！ これ、ぜんぶでどのくらいおっきいの？」

はかせ 「宇宙の果てがどうなっているのかは、誰にもわからないのです」

助手 「しかもどんどん膨らんでいるとか」

かばん 「宇宙が、泡みたいにたくさんあるっていう説もあるね」

カワウソ 「かんがえろとたのしいね！」

ジャガー 「きもちわるい……」

ジャガーは青ざめてうつむき、手で口元をおさえた。

はかせ 「ヒトは、地球の外、他の星まで行けたのです」

ジャガー 「ありえないだろ。いくらヒトがすごいって言っても」

かぼん 「そうだね……。わたしもそう思う」

はかせ 「でも、それがほんとうなら、地球の外にヒトがいるかもしれないのです」

助手 「ヒトがいない、戻ってこない理由もわかるかもしれないのです」

かぼん 「宇宙ステーションや月面基地との交信を試みたけど、なにも返ってこな

かったんだ。誰もいないのかもしれない。でもなにか、手がかりくらいは……」

はかせ 「直接行って、見てみればいいのです」

カワウソ 「わたし、いつてみたーい！」

ジャガー 「いや、あぶないだろ。そこはすつごく高くて、生きていられないんだろ

？」

はかせ 「そのために、安全に飛べる方法を研究しているのです」

かぼん 「さつき見てもらった通り、まだ研究は初期段階で、失敗ばかりだけどね。

本当にそこまで行けるのは、ずっとずっと先の話だよ」

はかせ 「かぼん、とっておきを見せるです」

かばん 「そうだね」

かばんが、はかせをみて微笑んだ。

ジャガー 「とっておき？」

カワウソ 「よくわかんないけどたのしそー！」

ジャガー 「……えっと、その前にさ……」

かばん 「なに？」

ジャガー 「しよっぱくはない水に入りたいんだけど……」

カワウソ 「なんかべたべたするよー」

倉庫のような建物（小型ロケット整備格納庫）のそばの簡易宿泊所にシャワールームがあった。

ジャガーとカワウソは、服を着たままシャワーを浴びた。

シャワールームの外から、かばんの声でした。

かばん 「あ！ その服、毛皮は取れるからね！ 洗っておくよー」※9

ジャガー&カワウソ 「へ？」

ジャガーとカワウソは顔を見合わせた。

15分ほどあと。

シャワールームのドアが開く音がした。

かばん 「ちようどいいね。もうすぐ焼けるよ……。うわっ！」

シャワールームから出てきたジャガーとカワウソは、裸だった。

かばん 「そうだった！ はかせ！ 持ってきてくれた？」

はかせ 「とりあえず、これを着るです」

助手 「この中から選ぶのです」

はかせと助手が、数着の服を持ってきた。

カワウソ 「あははっ！ へーんな毛皮ー！」

ジャガー 「どうやって着るんだ、これ……」

バスで移動する5人。運転手はかばんで、後部座席に4人が座っていた。

カワウソ 「おーいしーい！」

ジャガー 「もくもく……」

ジャガーとカワウソは、バスに揺られながら、半分ずつの焼き芋を食べていた。ふたりはダボダボの作業服を着ていて、上から緑色のジャケット ※10 を羽織ってい

た。

はかせ 「この島のおいも、その中でも最高のものをえらんだです。……はむつ」
 助手 「ちよつと時期が早いですが、この島の特産品なのです」

はかせと助手も、半分ずつの焼き芋を食べていた。

カワウソ 「もつと食べたい！ もつと！」

ジャガー 「えつと、もう一つくらい……」

かばん 「ストックはたくさんあるから、あとでいくらでも食べるといいよ」

バスの進む先に、先ほどの建物よりもはるかに巨大で高い建物が見えてきた。

ジャガー 「なんだ、こりや……」

カワウソ 「おつきーい！」

ジャガー 「正直、怖い……」

巨大な建物の中。

ジャガーとカワウソはそれを見上げて、言葉を失った。

巨大なロケットが縦置きされていた。高さは50mほどで、先ほどのロケットの10倍くらいあった。ロケット本体の周りには、本体よりも小さなロケット（ブースター）が4本付いていた。

かばん 「これがとっておき。ヒトが遺したロケットだよ」

はかせ 「これもサンドスターで飛ぶ……はずなのです」

カワウソ 「じゃあ、これもフレンズだねー！」

ジャガー 「ばけものだ……」

かばん 「けものじゃなくて、ばけものだよね。でも、フレンズが宇宙ステーション

まで行くには、このくらいの大きさが必要なんだ」

カワウソ 「これはいつ飛ぶのー？」

かばん 「わからない。ずっとずっと先……としか言えない」

はかせ 「われわれが生きているうちには、飛ばせないかもしれないのです」

ジャガー 「そんなに先なのか……」

カワウソ 「さっきのちっちゃいほうは？」

かばん 「うーん……早くても3か月後くらいかな……」

カワウソ 「飛ぶの见たい！ 早くならない!? あしたとか!」

はかせ 「むちや言うななのです」

助手 「失敗の原因の究明と、対策ができなければ、飛ばすことはできないので

す」

ジャガー 「できることがあれば手伝うよ」

カワウソ 「てつだうよー!」

かばん 「ありがとう。でも、あなたたちは、なわばりに帰りたいんじゃないの?」

ジャガー 「わたしはかまわないよ。ジャングルの連中は心配するかもしれないけど」

かばん 「じゃあ、いったん帰ってもらおう」

ジャガー 「帰るっていつても……海を泳ぐのか?」

かばん 「船があるんだ。わたしもいっしょに行くよ。なわばりに帰って、それでもふたりに、打ち上げを見たい、手伝いたいっていう気持ちがあったら、またこっちに来てもらおう。それでいいよね、はかせ」

はかせ 「めんどろですが、問題ないのです」

助手 「留守はわれわれにまかせるのです」

船（小型フェリー）※11 の上。

ジャガーとカワウソの服は、元に戻っていた。

カワウソ 「ねえねえ!」

かばん 「ん」

カワウソ 「あなた、どこかで会ったことない?」

カワウソは、少し首をかしげながら、かぼんの顔を覗き込んだ。

かぼん 「え？」

かぼんは、少しだけ動揺したようだった。

ジャガー 「はじめて会ったんだよ、カワウソ。こんなへんなフレレンズに会ったら忘れないだろ。……なーんか、ちよつとふしぎな感じはするけどねー」

かぼん 「……気のせいだよ。たぶん、初対面だよ」

後編へつづく

※1 秋といっても、サンドスターの影響があるので、気候・季節は日本とは違います。9月の終わりから10月の始めくらいです。そもそも、この世界の暦がどうなっているのかも不明です。漫画版（フライ版）では我々の世界と同じようですが、アニメーション期は月も季節もわからない……。

※2 この嵐は、このジャンルでよくあるスコールではなく、おそらく台風です。

パークが世界のどこにあるのかは不明なので、台風（Typhoon）とは呼べないかもしれません。サンドスター由来の気候と、パークの外から来た嵐が混ざった状態になりました。（これは別投稿のアレと同じ）

※3 ジャガーとカワウソが海水で泳げるのかはわかりません。やればできるんじゃないかと筆者は思っています。ただ、海水は苦手で、泳ぎたくないのではないかと思います。

※4 降って来たサンドスターを吸収しました。

※5 ロケットの素材は、アルミ合金などの金属、炭素系複合材、プラスチックなどです。金属は海に沈んで、プラスチックは浮くでしょう。炭素系複合材は浮くか沈むかわかりません。種類によって違うかもしれませんが、金属も、部品の形状によっては浮くでしょう。

※6 “大人”と呼べるかは微妙です。アニメ2期よりも少し時間が経っています。

※7 見えたとしても、ほとんど点にしか見えないです。

※8 火の鳥（フレンズ）ならいけるかもしれませんが。

※9 フレンズの服（あるいは体）には汚れが付かない、もしくは付いてもすぐに落ちるような気もします。そうすると、体を洗ったり洗濯をしたりする必要はないかもしれません。

※10 作業服は、昔ここでロケットの打ち上げを行っていたヒトの物です。緑色のジャケットは、どこかで見たようなやつです。全然かわいくない、エンジニアの服です。

※11 この船は、アニメ1期に登場したものに近い形です。ジャパリバスが1台乗って余裕がある大きさです。

あんのうじま 後編

ジャガーとコツメカワウソ（以下カワウソ）は、キョウシユウのジャングルに戻った後、再びアンノウジマへ向かった。

前回の打ち上げから1か月ほどあと。

建物（小型ロケット整備格納庫）の中。

小型ロケットは、カバールの一部やエンジンなどが外された状態だった。先端のカバーも外されており、姿勢・加速度のセンサーや、内蔵コンピューター（外見は四角い箱）、回収用パラシュートなどが見えていた。内蔵コンピューターからは2本のケーブルがのびており、そのうちの1本がテーブルに置かれたノートパソコンにつながっていた。

カワウソが、ロケットの内蔵コンピューターを、人差し指でつんつんと突いた。

カワウソ 「この子に……」

そして、その指を離し、上に立てた。

カワウソ 「名前をつけてあげようよー」

格納庫には、カワウソの他に、ジャガー、かばん、はかせ、助手がいた。

はかせ 「名前ならすでにあるのです」

助手 「RS—3A（あーるえす、すりーえー）なのです」

カワウソ 「それもいいけど、もっとたのしい名前にしよう！」

ジャガー 「たのしいって、どんな名前だ？」

かぼん 「そういうのは、やめたほうがいいんじゃないかな……」

かぼんは、少し暗い表情になった。

はかせ 「まあ、いいのです。みんなで考えてみます」

カワウソ 「じゃぐわちゃん2号がいいな！」

助手 「2号？ 1号があるのですか？」

カワウソ 「ここに！」

カワウソが、ビシツとジャガーを指差した。

ジャガー 「え？ えー……。それなら、こつめちゃん2号のほうがよくない？」

はかせ 「いまいちなのです」

かぼん 「かわいいと思うけど、かわいすぎるといっつか……」

助手 「では、“ライカちゃん”なんてどうでしょう？」※1

かぼん 「やめて……」

はかせ 「では、“クーニャ”はどうなのです？」※2

かばん 「もつとだめだよ！」

はかせ 「かばんも考えてみるです」

かばん 「うーん……カワウソか……」

かばん 「おったん39号、なんてどうかな？」※3

間。

カワウソ 「それだっ!!」

はかせ&助手 「最悪なのです（ハモってる）」

ジャガー 「39号ってなんだ？」

かばん 「えっと、飛行回数？」

はかせ 「そんなに飛ばしてないのです」

助手 「これは4号機なのです」※4

かばん 「分かっているけど、なんか降ってきたっていうか……」

はかせ 「意味がわからないのです」

ジャガー 「いいんじゃない？ カワウソも気に入ってるみたいだし」

カワウソ 「決定ー！ きみは、おったん39号だよー！」

カワウソが、ロケット（おったん39号）の胴体をぽんぽんと叩いた。

ロケットの残骸の回収の後、前回の打ち上げの失敗を踏まえて、機体と制御プログラムの修正、打ち上げ手順の見直しが行われた。

ロケットの分解と組み立ては数回行われた。地上試験とシミュレーションが繰り返行われた。

ジャガーは、わからないなりに積極的に作業を手伝った。重量のある部品や治具、発射台などを扱う際は、強力な助っ人になった。カワウソは、あんまり役に立たない……かと思われたが、意外に頭の回転が速く、手先が器用で、細かい作業をこなした。ふたりとも、作業を手伝ううちに、ロケットについての知識を蓄えていった。

前回の打ち上げから5か月ほどあと。アンノウジマ。

少し雲があつたが、晴れていた。

午前。島じゅうに島内放送が流れた。

島内放送 『ピンポンパンポーン』おほん！ こちらは、アンノウジマ宇宙センターなのです。本日の、ロケット打ち上げ実験は、予定通り、昼すぎに行うです。フレんズは、打ち上げ地点の、規制線の内側には、ぜつつたいに、入っちゃだめなのです。島の、南東の海、事前に知らせた範囲は、泳いだり、飛んだりしちゃだめなのです。……（繰り返し）……以上、放送おわり、なのです。『ピンポンパンポーン』……ふう……め

んどうな〔ガサガサ〕……次は11時？ ※5 ……つぎわたしやりたーい！ ……はかせ！ マイク！ 『ブツッ』

昼過ぎ。打ち上げ施設の広場。 ※6

はかせ 「33、32、31」 ジャガー 「第1触媒バルブ解放」

はかせ 「……、29」 かばん 「30秒前」

はかせ 「28、27 26」 ジャガー 「エンジンヒーターオン」

広場にはロケットの発射台があり、そこに小型ロケット（おつたん39号）が設置されていた。

はかせ 「25」

はかせ 「24、23、22、21」 助手 「サンドスター、温度、圧力ともに正

常」

はかせ 「……」 かばん 「20秒前」

発射台から1kmほど離れた、小高い丘にある小屋。 ※7

はかせ 「18、17、16」 助手 「空域内、飛行物体なし」

はかせ 「15、……」

はかせ 「13、12、11」 ジャガー 「第2触媒バルブ解放」

建物の中には、横長の操作卓と、大型のモニターと、ノートパソコンが3台あり、かばん、はかせ、助手、ジャガー、カワウソが椅子に座っていた。

モニターには地図、コマンドラインのウインドウ、数十項目の数値などが表示されていた。

はかせ 「10、9」

かばん 「10秒前」

はかせ 「8、7、6」

かばん 「最終安全装置……」

はかせ 「5」

かばん 「解除」

はかせ 「4」

建物の窓からは、ロケットが見えた。

はかせ 「3」

はかせ 「2」 カワウソ 「いぐにつしよん!!」 ※8

ロケットのノズルから、サンドスターが噴き出した。

はかせ 「1」 カワウソ 「あーんど」

サンドスターはの噴き出しは激しさを増し、強い光へと変わっていった。

はかせ 「ぜろ!」 はかせ以外 「リフトオフ!!」

はかせ 「なのです!」

ロケットが上昇を始めた。

かばんたちのいる部屋にも轟音が届いた。

ロケットは、サンドスターを噴き出しながら、空高くへ上昇していった。

カワウソ 「いつけー！ おったーん！」※9

5人はモニターを見つめた。そこには飛行コース（弾道）と地図が表示されていた。

助手 「コースは予定通りです」

ロケットが低い雲を抜けた。

モニターに表示されていた数値のいくつかが、赤く点滅を始めた。

はかせ 「エンジン出力低下！ いえ、上昇してるのです？」

ロケットのエンジンノズルから噴き出すサンドスターが、不整脈のように乱れた。噴射量だけではなく、方向にも不規則なぶれがあった。

かばん 「ぶれてる……。この前と同じだ……」

助手 「コースをそれました」

かばん 「修正できる？」

ジャガー 「やってる！」

ジャガーがキーボードの矢印キーを叩いた。

はかせ 「行きすぎ！ あばれてるのです！」

ジャガー 「手動じゃむりだ！ まかせるしかない！」

ロケットのエンジンノズルが細かく動いていた。機体に内蔵されたコンピューターが、暴れる機体を必死にコントロールしていた。

カワウソ 「おつたんがんばれ！」

助手 「蛇行してますね。高度も低いのです」

モニターに表示された飛行の軌跡は、予定の線通りに進まず、左右に波打っていた。

ジャガー 「ペイロード分離できないか!？」

カワウソ 「むりむり！ こわれちやうよ！」

かばん 「予定高度までもつかない？」

ジャガー 「もう少し、もう少しだっ！」

助手 「ん？ これは……」

ジャガー 「なんだこれ!？ 横に飛んでる！」

飛行の軌跡は、予定の線から大きく外れ、カーブして進んでいた。

かばん 「センサーの異常!？ じゃないね……」

助手 「レーダーは嘘をつかないのです」

はかせ 「このままだとキョウシユウに向かうのです！」

飛行の軌跡の先には、キョウシユウがあった。

カワウソ 「がんばれ！ おったんがんばれー!!」

かばん 「お願い！ 言うことをきいて！」

かばんがキーボードのテンキーを叩き、エンターキーと矢印キーを何度も叩いた。

ジャガー 「戻れ！ 戻ってくれ！」

はかせ 「もう修正できないのです！ かたむきすぎなのです！」

助手 「空域をはずれます」

かばん 「エンジン停止！ タンクの圧力を最大に！」

カワウソ 「え？」

助手 「やるんですか？」

はかせ 「しかたないのです」

ジャガー 「やるって、なにを？」

かばん 「爆薬ブロックE」

モニターに警告メッセージが表示された。

ロケットが高い雲を抜けた。

カワウソ 「だめえー！ー!!」

かばん 「ごめん！」

かばんがエンターキーを押した。

沈黙。

助手 「レーダーから消えました」

はかせ 「通信不能なのです……」

モニターに表示されていた飛行の軌跡が途切れていた。いくつかのエラーメッセージが表示され、数値の大半が「————」を表示していた。

カワウソが、呆然と窓の外を見つめていた。海上の高い空に、飛び散り落下していく破片と、広がっていくサウンドスターが見えた。

カワウソ 「おったん、死んじゃった……」

沈黙。

かぼん 「72秒、自爆。打ち上げ失敗」

かぼんは冷静な様子だった。ほんの少し、声が震えていた。

ジャガー 「うそだろ……」

カワウソ 「みてみて！ なんかきらきらしてるよー！」

カワウソは、窓の外を見つめ続けていた。他の4人も、モニターから目を離し、窓の外を見た。

サンドスターが、きらきら光りながら、高い空に薄く広がっていった。

かぼん 「サンドスターの、雲？」

雲状に広がったサンドスターが、ゆっくりと空を流れていった。それは徐々に降下していき、霧のように地表近くに広がっていった。

はかせ 「向かってくるのです」

サンドスターの霧は、打ち上げ施設の方へ向かっていた。

かぼん 「風で流されてる？」

カワウソ 「みんなー！ 外に出てみよー！」

カワウソは楽しげだった。

かばん 「え？ あぶないかも……」

ジャガー 「だいじょうぶ。あぶないものじゃないよ」

はかせ 「有害物質はふくまないはずなのです」

かばん 「なんでわかるの？」

助手 「野生のカン、ですかね……」

5人が建物を出た。建物の周囲の広い範囲に、霧雨か粉雪のようにサンドスターが降っていた。粒は小さいが、一つ一つがきらきら光っていた。

5人は空を見上げて、サンドスターを浴びた。

かばん 「すごい……」

かばんは、驚いた顔で周囲を見回した。

カワウソ 「帰ってきたよ！ おったんが帰ってきたよ！」

カワウソが走り出した。

ジャガーが上を向いて、目を閉じた。

ジャガー 「しみてくる……からだ……ここに」

はかせ 「前よりは、長く飛んだのです」

かばん 「そうだね。一歩前進かな」

カワウソ 「お空にきらきらのサンドスター！ たーのしー！」

カワウソは、サンドスターを浴びながら、丘を走り回っていた。

ほかの4人は、走り回るカワウソを見ていた。

カワウソ 「あはははははー！」

助手 「……………」

助手が、カワウソから顔をそらした。

かばん 「え？」

はかせ 「泣いてるのですかー？ じよしゆ？」

助手がはかせを見た。いつもの顔だった。

助手 「なにを言ってるのです？ そんなわけありませんよ、はかせ」

かばん 「はかせ、助手、また、残骸の搜索をお願いします」

はかせ 「まかされたです。……もう変なものは拾ってこないのです」

ジャガー 「だから変なもの扱いするなって……」

カワウソ 「あははははは！ きつもちいー！」

助手 「しかし、今回は搜索範囲が広いですよ」

はかせ 「レーダーの記録から計算しても、簡単には見つからないのです」

かぼん 「流されるし、沈むよね……」

ジャガー 「わたしとカワウソが、海を泳いで探すよ」

かぼん 「ええ!? また遭難するよ!」

ジャガー 「迷わないように、空からはかせと助手に見てもらえばいい」

かぼん 「じゃあ船も使おう。わたしもいつしよに行くよ」

ジャガー 「しよっぱい水は、苦手だけどね」

ジャガーが微笑んだ。

サンドスターの雨が止んだ。

カワウソが立ち止まった。

短い草の隙間に落ちたサンドスターが、きらきら光って消えていった。丘よりも広い範囲にサンドスターが落ちて、消えていった。5人はそれを見下ろした。

かぼん 「地上の星だね」※10

カワウソがジャガーに駆け寄ってきた。そしてジャガーに抱きついて、その胸に顔をうずめた。

ジャガー 「わっ! どうした?」

カワウソ 「……むうむう……」

カワウソは、顔をぐりぐりとジャガーの胸に押し当てた。

カワウソ 「う…………ぐしゅ…………」

ジャガーに抱かれたカワウソの肩が、少しだけ震えていた。

ジャガー 「やつぱり、しよっぱい水は、苦手だ」

ジャガーは、コツメカワウソの頭をやさしくなでた。

おわり

※1 犬です。光学機器メーカーのことではありません。この犬には名前が複数あります。

※2 これも犬の名前です。

※3 「おったん」の発音アクセントは、「お」につきます。「坊ちゃん」と同じです。

「おっさん」とは違います。

※4 RS-3Aは、前回失敗したものが3号機、今回打ち上げるのが4号機です（ヒ

トが飛ばしたものと地上試験機は含めない)。5号機が組み立て中です。地上試験はなんとかうまくいきましたが、これまでの打ち上げは全て失敗しています(リフトオフ直前に爆発したのも)。

RS-3A以前の機種を含めると、かばんたちは25回ロケットを打ち上げています(そのうち少数が成功)。

※5 この放送は数回行われました。「11時」と言っていますが、時計が読めるフレズはごく一部でしょう。

※6 射点から半径2km(管制室は例外)と、飛行予定コース上十余裕分(かなり広く設定)は立ち入り禁止、飛行禁止になっています(周囲に生息するフレズには通知済みです)。

※7 小型ロケットの打ち上げ用の、簡易の管制室がある小屋です。一応、小さな破片が飛んで来ても大丈夫なつくりです。大型ロケット用の発射台や管制室は別にあります。

※8 「イグニッション(点火)」と言っていますが、サンドスターロケットの場合は「エンジンスタート」と言うほうが合っているかもしれません。これは気分の問題です。「イグニッション(点火)」から「リフトオフ(浮上・発射)」まで2秒ほどかかります。カワウソが点火ボタンを押したのではなく、コンピューター(管制室)のタイマーで

エンジンスタートをしています。基本的には自動です。

※9 カウントアップを読み上げていませんが、これも気分の問題です。コンピューター上ではカウントアップをしています。

※10 作品を台無しにしかねないセリフですが、入れたかったんです。